

# 松波むかし語り ここに住み続けて

その50

今回のお客様

居酒屋「人吉」を経営する

うちむら つるくに

**内村 鶴国**さん 75歳 2丁目

“いろいろな人に励ましてもらったから、この町で  
30年商売を続けてこれたんです！”



『人吉』というのはあの『ひとよし』ですか？」とお聞きするとその通り、内村さんは熊本県南部の盆地で城下町(昔は国鉄の街で、現在も観光用の蒸気機関車が走っています)の人吉市に4人きょうだいの末っ子として、昭和13年誕生しました。「人吉でも北の方、『五木の子守唄』で名高い五木村や川辺川に近い所で育ちました」。ちなみに城下町としての人吉は、鎌倉時代にいまの静岡県から移った豪族、相良(さがら)氏がそのまま幕末までお殿様であったお城で、そうした“長期政権”は薩摩の島津氏のほかにくつもありません。

人吉は山に囲まれたおだやかな田舎町ですね、とうかがうと、「中学校が遠くて3里(約12キロ)の道のりを朝6時に起きて通いました」とのこと。「足はその頃鍛えられた」と言う通り、学生時代は長距離のランナーであったとか。18の年、大阪に出て3年、お金を貯めて東京に越してペンキ屋を25年ほど経営しましたが、当時お元気だった奥様と「二人で商売ができれば」と千葉に越して来ました。松波へは昭和36年に移り住んで、ペンキ屋の時代、夜は割烹料理店で修業したウデを生かし、西千葉駅の近くに定食とそばや天ぷらを食べさせる店をもちました。そこが立ち退きに遭い、現在の店で居酒屋を始めました。「松波に来た当時は、近くを高圧線が横切っていて、表通りもほこりっぽい通りでした」。

「焼き鳥を20年焼き続けて、『もっとレパートリーをひろげなくちゃ』と思ってコツコツとメニューを工夫しました。当時はサラリーマンや公務員、それに千葉東高の先生もごひいきだったとか。「夕方4時から店を開いて、朝の2時頃までやってたでしょうか」。

西千葉駅から作草部に向かうゆりの木通りを一本入った県営住宅に向かう道沿い、当時人通りの多かったこの通りは、千葉競輪に通う人たちがハズレ車券を捨てながら帰ることから“おけら街道”とも呼ばれていました。「この通りの飲み屋は競輪の帰り客も多かったんですが、私は、ツケで吞ませるのはいやだったので入れなかった」というエピソードも。

一人商売、しかも立ち仕事のため、健康にはことのほか留意している内村さんです。「食べるものはすべて自分で作りますし、ご飯は一膳にして野菜とくだものを多めに摂るようにしています。それに、店が終わった0時過ぎと朝、犬を連れて散歩を欠かしません。遠い熊本から出てきたんだ、食べ物と運動に気を付けてがんばらなくちゃと思ってね」。

以前は、公民館周辺の店をよく利用したそうです。「志田商店、佐藤八百屋、大網米店、越後屋酒店」といったお店の名前がすらすら出てきます。「いろいろな人たちに励ましてもらったから、この町で30年以上商売を続けられたんです。松波は住みよい町ですね、あまり干渉されないし……。公園は「使わせてもらっている」という気持ちから、朝、松波公園内のごみを拾って歩くという内村さん、無灯火の自転車やマナーの悪い若者を見つけると叱るといいます。「いい悪い、はちゃんと言わないと」。町内会への希望をお聞きすると、「人が集まって話せる場所をつくってほしいです、『1週間に一度は外へ出てお話ししましょうよ』ってね。むしろ1枚でも敷いて、語らいの場をつくって」が内村さんの願いです。



静かにお酒を飲む店です